今昔物語 第37話

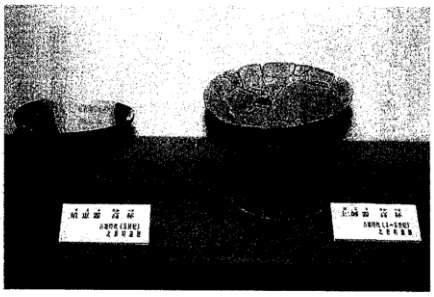
高坏（たかつき）（杯）

（北新町遺跡）

坏・杯の脚の付いたものを高坏・高杯と呼んでいます。

縄文・弥生・古墳時代のような古代にある土製のものも高坏と呼んでいます。そして平安・鎌倉時代では、専ら木製となった高杯が供膳の具とされていたと考えれば、古墳時代までの高坏にも階級生活の名残があるのではないでしょうか。土製のものでは製作上の制限もあったとみえ、大型のものがそう多くは作られなかったようです。木製のものには口径30チン以上のものが、既に弥生時代に現れています。遺跡の関係上、古墳時代の木製品を見ることは少ないです。

この弥生時代の高杯の形を考えてみますと、平安・鎌倉時代の供膳具の起源は少なくとも古墳時代のものと考えられます。中世の高杯は、その形は単に浅い縁のある台に脚があり、その口径はすべて30チン以上もあり、その中央に飯を盛った椀を置き、それをめぐって菜を盛った幾つかの盤（さら）を並べたものでした。後の江戸時代に盛行した折敷（おしき）と同じ用をなしたものであり、古墳時代までの土器の高坏とは異にするものであったと推測出来ます。



今昔物語 第38話

土錘（どすい）

（北新町）

土製の錘（おもり）のことを言います。

大きく区分けしますと、二つに分かれます。一つは、土器の破片を長方形やだ円形にすり減らして整形し、両端にひも掛けを持つものです。ほかの一つは、最初から土錘として作られたもので、球状または円柱状をしており、真ん中にひもを通す貫通した孔（こう）をもっています。

前者は、縄文時代の早期から現れて、中・後期に最も盛行しました。

後者は、弥生時代や古墳時代に一般的に使われたもので、まれには縄文時代にもみられるものがあります。共に4～5チン前後の大きさを普通としています。その用途は漁網の錘と考えられています。